



飯田 高嘉氏
（いいた たかよし）
岐阜市民病院 放射線科副部長

平成5年岐阜大学医学部卒業
高山日赤病院を経て岐阜市民病院放射線科副部長。専門は放射線治療。日本放射線学会専門医、日本放射線腫瘍学会認定医。

痛みを伴う多発性の骨転移

がんの症状のひとつである骨転移による痛み。その治療法には、薬物療法、外科療法、外部放射線治療があります。そして最近では、放射性同位元素「ストロンチウム-89」を注射するという治療法が始められています。

注射後に周囲の人に放射線の影響があるのではないかと心配ですが？

A この薬から出る放射線はベータ線とよばれ、体内では最大8mmの範囲にしか影響を及ぼしません。したがって、体内にあるストロンチウム-89が周囲の人に影響を及ぼすことはほとんどありませんので、この治療のために入院する必要はありません。

放射線による副作用が心配ですが？

A 血液中の成分である血小板や白血球が注射前に比べて20～30%減少することがあります。このようなことから注射前と注射後は、定期的に血液検査を受けて下さい。必要に応じ適切な処置を行います。また、5～10%の患者さんで、薬を注射して2～3日後に一時的に（2～5日間）痛みが増すことがあります。その場合、必要に応じて痛み止めの薬を増やし、その痛みを和らげる治療を行います。

ストロンチウム-89とはどのような薬ですか？

A この薬は、がんの骨転移による骨の痛みを和らげるための注射用の薬で、治療に適した放射線が放出されます。注射されると骨の成分であるカルシウムと同じように骨に運ばれ、がんの骨転移部に長くとどまり、その部位に放射線が当たることによって痛みが和らぐと考えられています。痛みが半分以下になる割合は8割から9割といわれており、通常注射の1～2週間後から痛みが和らぎます。

通常の放射線治療とはどのように違いますか？

A 通常の放射線治療は、体の外から骨転移部に放射線を照射するので外部照射とよばれ、最も有力な治療の一つです。ストロンチウム-89による治療も、放射線を利用しますので放射線治療の一種ですが、この薬は骨の転移病巣に集積して長くとどまる性質があり、骨転移部に内部から放射線を当てることによって痛みを和らげると考えられています。外部照射は、骨の痛みの緩和以外の治療にも有用ですが、次々に放射線を照射することによる副作用（骨髄機能の抑制や、正常臓器への影響）が考えられます。この薬による治療は、外部照射のような除痛以外の効果を求めたものではなく、骨の痛みの緩和のみを目的としており、多数の骨転移のある場合に有用であると考えられています。

